

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

SEPTEMBER  
2018

9

歩いて探る、地名の謎

～三河湾岸、散策篇～



## 豊かなる浜と丘の話

愛知県には頭に「豊」が付く地名が非常に多い。豊橋と豊田を筆頭に、お稲荷さんの豊川、古戦場の豊明、イチローの出身地である豊山、県内最高峰の茶臼山がある豊根と、現行の自治体だけで六つもある。地区名や集落名も数多く、知多半島にも豊浜と豊丘がある。

豊浜は伊勢湾側、豊丘は三河湾側で、ちよつと背中合わせの恰好だ。まるで兄弟のようなこの地名はどちらも明治十一年（八七八）の生まれ。今年でちよつと百四十歳を迎えた。しかし、ひとつだけ不思議なことがある。それは、美浜町と南知多町に豊丘があることだ。まずはその謎から考えてみたい。

豊浜・豊丘の地名の誕生のきっかけは、その年に「郡区町村編成法」という法律が施行されたことによる。これは、発足間もない明治政府が、地方自治組織を管理しやすくするために定めたものの。これに基づき、小さな集落を一つの村としてまとめる作業が全国的に行われたのだが、その際、新しく作られた村に名前を付ける必要が生じた。そうしてできたのが、伊勢湾側の須佐村・中須村が合併した豊浜村と、三河湾側の山田村・乙方村・切山村・矢梨村が合併してできた豊丘村だ。

豊浜村の村域は、現在の南知多町役

場や豊浜漁港のある一帯だ。しかし『知多郡史』によると、古くは離島を含む半島南部の広範囲を指していたという。そんな地名を新しい村の名前として採用したのは、大いに栄えていた漁師町にとつて「豊漁の浜」に通じるこの名はふさわしいと考えたからではないだろうか。

いっぽう豊丘はというと、矢梨は海に面しているものの、山田、乙方、切山は山際にあり、どちらかというと丘のイメージだ。なので、村名も地理的な特徴から命名されたと思われる。

豊丘村は、明治二十二年（八八九）に北隣の古布村を合併して村域を拡大する。しかし明治三十九年（九〇六）になると村は南北に分かれ、北の矢梨・切山・古布は河和町に、南の山田・乙方は豊浜町に合併してしまった。南北分断とは穏やかでないが、もともと政治の都合で作られた村だし、それぞれが繋がり強い大きな町にくつittedほうが何かと都合もよかつたはず。おそらく、惜別々という感じではなかつただろう。た

### 今回の主な参考文献

#### 「尾張国地名考」

安永五年（一七八六）に佐織現あま市に生まれた郷土史家津田正生が幕末に執筆。尾張全域の地名の由来を考察しており、全12冊に及ぶ。大正五年（一九一六）に冊にまとめて出版され、全六八〇頁のうち約七〇ページが知多半島に割かれている。

#### 「知多郡史」

昭和以前の知多半島の歴史・地理・行政・文化を網羅した地域で、大正十一年（一九二二）に全三巻で刊行された。発行は、明治時代後期から大正時代まで半田に置かれていた知多郡役所。

# 歩いて探る、 地名の謎

## 三河湾岸、散策篇

自分が住んでいる土地の名前について考えたことがあるだろうか？  
その土地に長く住んでいても、地名の由来は意外と知らないものだ。  
地名を足掛かりに知多半島のあちこちを巡り歩くシリーズ、  
今回は美浜町東部と武豊町を南から北へ散策してみた。

## 土地を眺めると、地名の由来がおぼろげに見える。

だ、別れても豊丘という地名だけは**大字**として生き残り、現在に至っているというわけである。

紙幅の都合で今号では美浜町的を絞ることにしたので、美浜町豊丘の矢梨と切山に行ってみる。

三河湾岸の矢梨は、知多半島で最初に潮干狩りが始められた集落だ。ヤナシという地名は全国的に分布するが由来はよくわかっておらず、『尾張国地名考』にも「山無の意味だろうか？」と書かれている。豊丘の他集落と比べると山らしい山はないので、この説もありだろう。集落には矢梨と同じ語感の阿奈志神社があり、これも地名と無関係ではなさそうだ。

切山は、矢梨から二キロほど西、五宝川の**上流**にある。三方を山に囲まれた山里の雰囲気で、海辺の矢梨とは対照的だ。切山のキリという言葉には開墾地の意味があり、山あいの土地を切り開いて村と耕地を作ったことが由来と思われる。『尾張国地名考』には「正しい字は霧山」ともあり、昔は霧が立ち込める深山幽谷のような風景が見られたのかもしれない。

河和とは曲がった川である

続いては古布と浦戸。ここについては本誌2017年8月号「幼なじみの古布がたり」で詳しく取り上げたように、戦時中に河和海軍航空隊を建設するため、古布は海沿いから内陸へ、浦戸は河和の町はずれに強制移転させられたという、戦争に翻弄された歴史を持つ。

浦戸の由来について『尾張国地名考』では「浦多和の略。浦撓のところ」と考察されている。撓とはたわむ、湾曲の意味で、浜辺がゆるやかに弧を描いていることが地名の由来だというのだ。地形的にはまさにそのとおり。その昔、河和から続く海岸は白砂青松の続く風光明媚なところで、有名な須磨の浦（兵庫県神戸市）にあやかつて「小須磨ヶ浦」と呼ばれた時期もあった。

古布のほうは、知っている人でないと絶対に読めない超難読地名だ。なぜ古い布がコウになるのだろうか。何かいwakがありそうなのだ。しかし『尾張国地名考』にも、他の文献を調べてみても、決定的な由来が書かれておらず、何ともどこかしい。白砂青松の海岸と布の組み合わせだと、思い浮かぶのは三保の松原（静岡市清水区）の羽衣伝説。美しい女性が、身に纏っていた古い着物を海辺の松の木に掛けて水浴びをしていた、な

どという羽衣伝説のような話でも伝わっていれば面白いのだが。

さらに北上すると、知多半島南部の三河湾側の要地として古くから栄えてきた河和に入る。こども難読の部類に入る地名だろう。

その由来について、『尾張国地名考』は「ずばり『河輪の意味』としている。これは、川の形が輪のように曲がっているということだろう。河和の町の中には新江川が流れているが、河和駅前から美浜町役場の西側まで大きな弓のようなカーブを描いている。現地で川沿いの道を辿ってみると、まさしくその解釈どおりであることがすぐに理解できる。『尾張国地名考』の著者の津田正生は執筆のために各地を訪ね歩いたといい、おそらく浦戸の浜も河和の川もその目で見、そのうえで考察を記しているのではないだろうか。

新江川を挟んで河和と向かい合う北方の集落は、建物が建て込んでいるので河和と一体化したかのよう。この場合は、河和の北に位置するので北方かと単純に思うが、『知多郡史』によると、もとあつた「河和郷」が、年貢徴収の都合から南北に分けられて河和郷南方と河和郷北方になり、それがやがて現在

の河和と北方になったとある。

### 時志と布土と、消えた駅と

北方から海沿いに進むと時志、そして布土に入る。こども、河和と北方と同じく、家並がひと続きのように見える。『尾張国地名考』では、時志はかつて布土の支村で、「布土岸」の布を省略してトキシになったのでは、としている。その布土はというと、もともとは北隣の武豊町富貴に含まれており、富貴の端に位置することから「富貴外」、そこから貴を省略してフトになったのだろう、と書いている。確かに、地形的には時志は布土の一部、布土は富貴の一部とみなせなくもないが、やや強引にも思える。

さて、時志と言えはまず思い出すのが、南知多三十三観音第一番札所にして知多四国霊場番外札所、初代尾張藩主徳川義直も崇敬したことで知られる時志観音影現寺だろう。時志観音については本誌2018年1月号「プレイランド・ミステリー・ツアー」で、昭和初期に観光名所として脚光を浴びたという話題を取り上げ、そこに、時志観音の売り出しに「役買った名鉄が時志駅を設置した」ということを書いた。



河和に移転した「新浦戸」



矢梨の阿奈志神社



河和を流れる新江川



十年ほど前まで河和海水浴場があった、河和口駅前の海岸



名鉄屈指の縁起のよい駅名、富貴駅



名鉄屈指の難読駅名、上ヶ駅



ヒジリ田の地名表示板

## 町の顔である駅、その名前は全国に発信される。

その時志駅は、昭和十二年（一九三六）から昭和十九年（一九四四）までのわずか八年間しか営業していなかったのだが、時志の集落へ入り込むと、今も駅の跡が残っているのには驚かされる。場所が国道の水門脇の三差路に程近い踏切のそば。低く短いホームが草に埋もれており、ここに参拝客がどつと下車した光景なんて今では想像もつかないような雰囲気だ。しかも隣の河和口駅からはわずか四百メートルしか離れておらず、そんなに便利にも思えない。しかし、時志の名が駅名になっていることは、大変な宣伝効果があったのだろう。

その隣の河和口駅は布土の南の外れに位置しているが、実質的に布土地区の玄関駅である。ならば布土駅という駅名にすればよさそうなものだが、そうならなかったのには理由がある。それは、河和口駅とは別に布土駅が存在していたからだ。

少し歴史を辿ってみよう。名鉄河和線が河和口まで開通したのは昭和七年（一九三二）。このとき末端区間には、富貴―四海波―布土―河和口の各駅が設置された。四海波駅があったのは富貴南部の笠松地区。そして布土駅があったのは布土川の鉄橋を渡ったあたり。そこは

南北に長い布土のちょうど真ん中で、こちらのほうが地名を名乗るのにふさわしい位置といえた。

しかし四海波駅と布土駅は昭和四十七年（一九七二）に姿を消し、両駅の中間に二代目布土駅が設置された。二代目布土駅の場所は布土の北の外れで、家並から少し外れた農地の真ん中。初代より少し不便になったので利用客数は低迷し、名鉄全線で合理化が進められていた平成十八年（二〇〇六）に廃止されてしまう。地元では廃止反対の声も沸き上がったが、初代から通算して七十四年の歴史に終止符が打たれたのだっ

た。鉄道路線図から布土の名が消えてしまったのは、少し残念ではある。

## 長尾と大足、武雄と豊石

最後は武豊町を南から順にめぐってみよう。

布土の項で引き合いに出した富貴は、いかにも縁起のよい地名だ。その由来について、江戸時代に作られた尾張国の地誌『尾陽雜記』には、この地に城があった時代は周辺の村に比べて裕福だったので富貴と呼ぶようになった、という説が書かれている。しかし『尾張国地名考』で

うとしている。

最後は大足と長尾。この二つは現行の住所表記では使われていない地名なので、地元の人以外にどこまで通じるだろうか。大雑把に言うくと、武豊の中心地区のうち南半分が大足、北半分が長尾になる。

武豊の町名の由来は有名だ。それは、明治十二年（一八七八）に大足村と長尾村が合併して新しい村が発足する際、その名前を地名の足し算ではなく、長尾の氏神である武雄神社と大足の氏神である豊石神社から二文字ずつ取って武豊という地名を創作したという話。勇猛な「武」と繁榮の「豊」というマッシュアップは字面も語感もいいし、合成地名の傑

作と言っていだろう。仮に地名を足し算した場合、大・足・長・尾をどう組み合わせもしっくりこない。

大足について『尾張国地名考』では、もとは大垂（オオタリ）だったのが大足の字に変わり、読みもオオアシになったのだろう、としている。その意味は、山から流れ出た水が海に落ちるところ。大足の西には山を隔てて大谷（常滑市）があり、オオタリもオオタニも意味は一緒。しかし似たような地名では紛らわしいので、こちらは大足に変わったのではないか、というのだ。説得力があるようなないような…。

かたや長尾の地名については、『知多郡史』には次のように書かれている。昔、

知多半島の中央部は枳豆志莊と呼ばれ、山城国醍醐（現京都市山科区）にある三宝院の所領だった時代があった。石田という人がこの地を治めるために山城国から移住してきた際、その三宝院の守護神である長尾天神を勧請。そこから地名も長尾村になり、長尾天神はいつしか「武雄」と書くようになったというのだ。

しかし武雄神社の由緒はこれとは少し異なっている。武雄神社は奈良時代以前にはすでにこの地にあり、鎌倉時代に醍醐からやって来た岩田氏が長尾城を築いた際、武雄神社を城内と領内の鎮護として定めたという。また『尾張国地名考』は、長尾の尾は岡の意味として



在りし日の四海波駅、昭和36年（1961） 撮影：河合克己さん



廃止を間近に控えた“二代目”布土駅、平成18年（2006）



時志駅跡のホーム付近を通過する電車

おり、長尾天神についてはまったく触れていない。半島の真ん中から伸びてきた長い丘が海に落ちるところに町が広がっていることを考えると、この場合は『尾張国地名考』に軍配を上げたくなる。

旧武豊町は住所表記に大字の単位を用いなかったので、地図を見ると、大足と長尾の一带は細かな小字がびっしり記されており、なかなか面白い。中には上ヶ、エケ屋敷、ヒジリ田といったカタカナ混じりの地名もある。上ヶとエケ屋敷については確かな由来がわからないが、ヒジリ田は漢字を当てると「聖田」で、こんな伝承がある。

応仁の乱の頃、長尾を通りかかった修行僧が、武士たちによつて荒らされた村の惨状を見かね、海辺を干拓して新田を開いた。村人たちに耕作の仕方を教えると、秋にはたわわに稲穂が実った。感謝した村人たちはその修行僧を「聖上人」と呼び、新田をヒジリ田と呼ぶようになった。暮らしが安定するようになると村人は聖上人が住まいにしていた小さな庵を立派な御堂に建て替え、それがのちに知多四国霊場第二十三番札所の蓮花院になったという。

それにしてもいろいろな地名譚があるものだ。一筋縄ではいかない地名探求の旅は、いずれ他の地区で続編を試みたい。

ふるさとの文化とともに、地名も語り継いでいきたい。

